

1. 銅の国際市況と需給動向（2005年5月）

金属資源開発調査企画グループ

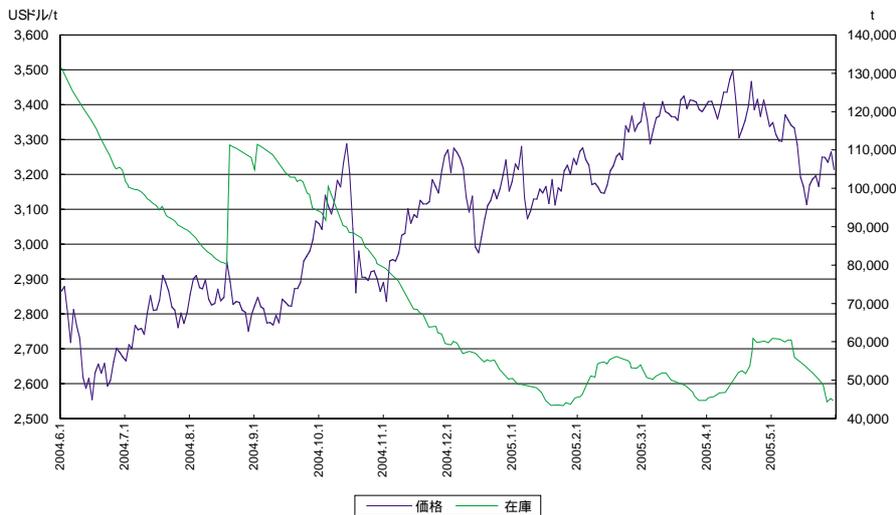
- 銅のLME価格は、2005年に入り、総じて需給バランスのタイト感、ドル安の進行、原油高などを材料に上昇を続け、2月末には15年ぶりの3,400ドル超をつけ高水準で推移していたが、5月には、調整局面に入っている。
- 2005年1～3月の鉱山生産は前年同期比で7.5%増。地金生産は4.1%増。一方、消費量は米国、日本等の先進国が低調で5.5%減。その結果、1～3月の需給バランスは、前年の452千tを大きく下回る59千tの供給不足。
- 今後、銅市況は基本的にタイトな需給を背景に、ファンド資金等の動きにより当面は高いレベルで推移するものの、市場が急変する可能性もあり不安定な動きを続けると考えられる。

1. 国際価格

銅のLME価格は、2005年に入り、総じて需給バランスのタイト感、ドル安の進行、原油高などを材料に上昇を続け、2月末には15年ぶりの3,400ドル超をつけ高水準で推移していたが、5月には、調整局面に入っている。

銅のLME価格は年始に一時下落し、3,100ドル台を割り込んだが、その後は、需給バランスのタイト感や米ドル安を背景にコモディティに対する投機人気が見えをみせない中、上昇を続け、2月末には15年ぶりに3,400ドル超えを果たした。その後もドル安の進行、低水準の在庫レ

ベル等を材料に3,300ドル台を堅調に推移していたが、5月になって好調な経済指標を背景とした米ドル連続利上げに伴うドル高等により一時3,100USドル/t台まで反落し、5月末時点でのLME価格は3,214ドル（図1-1）。



銅	2004年							2005年				
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
LME在庫 (t)	101,475	87,600	111,325	91,800	77,925	59,775	48,875	46,350	52,650	45,275	61,000	44,325
平均価格 (現物)	2,687	2,808	2,846	2,895	3,012	3,123	3,145	3,170	3,253	3,380	3,394	3,249

出典：国際銅研究会

図1-1 銅価格と銅在庫量の推移

2. 需給

1～3月の鉱山生産は前年同月比7.5%増の3,542.7千t。3月の鉱山の設備稼働率は88.6%と80%台で推移。

1～3月の精錬生産は前年同月比4.1%増の3,972.9千t。うち、一次製錬は5.5%増となったものの、二次製錬は5.3%の減。稼働率は79.4%と定修等の影響により80%前後で低迷。

国別の1～3月の需要は、最大消費国中国が前年同月比6.4%増。一方、米国、日本、ドイツが軒並み10%以上の減となり、世界計では5.5%減の4,031.9千t。

その結果、1～3月の需給バランスは59.0千tの供給不足（季節調整後は25千tの供給超過）。

一方、LME在庫量は1月中旬に45千tを割り込んだ後、ほぼ一か月スパンで回復と下落を繰り返し、5月末には再び45千tを割り込んだ（5月31日現在約44千t）。

供給

2005年1～3月の鉱山生産は前年同期比7.5%増の3,542.7千tであった。月別の鉱山生産を見ると、2004年後半1,200千t台を維持し、12月1,350.6千tと2004年最高値を更新した後、2005年1月1,207.1千t、2月1,088.4千tと大幅に減少したが、3月は1,247.3千tと回復した。鉱山の設備稼働率も2004年は高レベルで推移し、12月に97.4%まで上昇したが、2005年に入り80%後半に下落、3月は88.6%であった。2005年1～3月の国別生産量は、3位ペルーが前年同期比0.7%減となった以外の主要国は、最大生産国チリが2.6%増、2位米国8.9%増、4位豪州15.3%増、5位インドネシアがGrasberg鉱山の事故からの回復により90.6%増と大幅に増加した。国際銅研究会は世界の銅鉱山生産を2005年8.0%増の15,678千t、2006年1.0%増の15,840千tと予測している。

2005年1～3月の地金生産は前年同期比4.1%増の3,972.9千tであった。月別の地金生産は2004年末まで増加傾向で12月1,382.0千tまで増加したが、2005年1月1,367.4千t、2月1,242.2千tと減少、3月は1,363.3千tと回復した。2004年11月まで精錬所稼働率は上昇傾向にあったが、12月81.6%、2005年1月80.3%、2月は80.5%、3月79.4%と定修等の影響により80%前後で低迷している。2005年1～3月の国別生産量は、最大生産国のチリ（EW生産を含む、以下同様）が3.3%増、2位中国21.8%増、5位ロシア7.5%増となる一方、3位日本0.5%減、4位米国0.3%減、6位ドイツ4.0%減となったが、全体では増加した。国際銅研究会は世界の銅地金生産を

2005年8.5%増の17,110千t、2006年5.6%増の18,074千tと予測している。

需要

国別の2005年1～3月の消費量は、最大消費国中国が前年同期比6.4%増となる一方、その他主要国では2位米国11.3%減、3位日本12.9%減、4位ドイツ18.7%減、5位韓国8.5%減となり、世界計では5.5%減の4,031.9千tであった。世界の消費を月別に見ると、2004年12月1,285.6千t、2005年1月1,391.2千t、2月1,251.6千tと増減を繰り返し、3月は1,389.1千tと前月から増加した。注目の中国の消費動向も、2004年12月263.7千t、2005年1月318.3千t、2月256.5千tと増減を繰り返し、3月は321.7千tと前月から増加した。国際銅研究会は世界の銅地金消費を2005年5.3%増の17,370千t、2006年4.6%増の18,167千tと予測している。

需給バランス

2005年1～3月は59.0千tの供給不足（季節調整後は25千tの供給超過）であった。2004年12月に96千tの供給超過となった以降、2005年1月24千t、2月9千t、3月26千tと供給不足が継続している。季節調整後の需給バランスでは、2004年12月30千t、2005年1月16千tの供給不足であったが、2005年2月19千t、3月21千tの供給超過となっている。国際銅研究会は世界の銅地金需給を2005年259千tの供給不足、2006年93千tの供給不足と予測している（表1-1）。

表1-1 銅の需給状況

単位:千t

銅	2004年												2005年				対前年 同期比 (%)	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年計	1月	2月	3月		1-3月計
鉱山生産量	1,078	1,044	1,175	1,176	1,212	1,210	1,233	1,246	1,228	1,293	1,283	1,351	14,529	1,207	1,088	1,247	3,543	7.5
地金生産量	1,275	1,222	1,320	1,276	1,270	1,290	1,328	1,345	1,343	1,355	1,362	1,382	15,768	1,367	1,242	1,363	3,973	4.1
一次地金生産量	1,117	1,065	1,130	1,110	1,098	1,117	1,174	1,186	1,185	1,190	1,201	1,229	13,802	1,200	1,093	1,201	3,495	5.5
二次地金生産量	158	157	190	166	172	173	155	159	158	165	161	153	1,967	167	149	162	478	-5.3
消費量	1,365	1,360	1,544	1,422	1,350	1,400	1,331	1,277	1,410	1,344	1,434	1,286	16,523	1,391	1,252	1,389	4,032	-5.5
需給バランス	-90	-138	-224	-146	-80	-110	-3	66	-67	11	-72	96	-755	-24	-10	-26	-59	

出典：国際銅研究会

在庫

LME在庫量は、年明けに入ってから減少を続け、1月に45千tを割り込み2月には一時56千t台にまで回復したものの、その後も横ばい傾向から減少に転じ、3月末には再度45千t

を割り込んだ。4月に入ると徐々に回復し、4月後半から5月中旬にかけて一時60千t台にまで回復したものの、5月末には再度45千tを割り込んだ。5月31日時点のLME在庫量は約44千t（表1-2）。

表1-2 LME 国別銅在庫の推移

単位:千t

国名	2004年								2005年				
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
ベルギー	0.025	0.025	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
フランス	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
ドイツ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	2.225	0.000	0.000	0.000
イタリア	1,650	0.000	0.000	0.050	0.050	0.050	0.000	0.000	2.250	4.000	5.425	3.550	0.650
韓国	3.475	3.475	2.725	12.075	6.125	7.875	2.975	1.500	1.100	1.100	1.275	1.075	0.100
マレーシア	0.000	0.000	0.000	0.800	1.100	1.200	1.200	1.125	1.125	1.025	0.325	0.000	0.000
オランダ	2.125	0.050	0.000	0.000	0.000	0.000	1.850	1.275	2.100	6.000	3.950	20.100	10.275
シンガポール	1.500	4.300	3.575	29.925	24.000	23.675	15.050	9.275	3.825	3.025	0.575	0.000	0.000
スペイン	1.350	0.475	0.475	0.475	0.100	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.550	4.175	5.075
スウェーデン	0.000	0.000	0.000	0.000	0.050	0.050	0.350	0.650	1.050	1.225	1.225	0.000	0.000
アラブ	0.000	0.000	0.000	1.600	1.600	1.600	0.800	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
イギリス	8.575	0.400	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.450	0.000	0.000
米国	113.550	92.750	80.825	66.400	58.775	43.425	37.500	35.000	34.850	33.900	31.500	32.100	28.225
合計	132.250	101.475	87.600	111.325	91.800	77.925	59.775	48.875	46.350	52.550	45.275	61.000	44.325

出典：国際銅研究会

今後の見通し

国際銅研究会、主要生産者等では、本年後半には需給緩和することが予想されているが、在庫の低水準と投機筋による旺盛な買いで、相場は現在の水準を著しく下回ることはないという見方が有力である。

2. 鉛の国際市況と需給動向（2005年5月）

金属資源開発調査企画グループ

1. 鉛の国際価格は、中国等の需要の急拡大による供給不足とLME在庫が減少していることから、2005年に入ってもt当り900ドル以上を保ち、3月以降も1,000ドルを挟み950～1,033ドルの間で推移しており、引き続き1990年以来14年ぶりの高価格水準を保っている。
2. 2005年1～3月の鉛生産は、前年同期比4.2%増。地金生産も同9.3%増となったが、消費は前年とほぼ同じであり、ほぼ需給バランスが取れている状況となった。
3. LME在庫量は5月末には29.7千tまで減少し、8か月連続の減少となった。

1. 国際価格

鉛の国際価格は、中国等の需要の急拡大による供給不足とLME在庫が減少していることから、年末にはt当り1,056ドルの2004年最高値を付け、1990年以来14年ぶりの高値を更新した。3月以降も1,000ドルを挟み950～1,033ドルの間で推移した。

鉛の国際価格は、中国等の需要の急拡大や米国のドル安・低金利政策に加えLME在庫が極端に減少していることから、2003年秋以降価格上昇が続き、2004年末はt当り1,056ドルの年最高値を付け、1990年以来14年ぶりの高値を更

新した。2005年の年始に一時下落したものの、900ドル以上を保ち、3月8日には1,033.5ドルの今年最高値を付けた。その後、1,000ドル近辺で価格が推移し、5月末時点でのLME価格は991ドル。（図2-1）



鉛	2004年							2005年				
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
LME在庫 (t)	45,125	37,450	35,625	53,075	49,200	42,900	40,475	35,200	33,625	33,275	32,700	29,700
平均価格 (US\$/t)	870	940	922	935	933	968	975	953	978	1,006	986	988

出典：国際鉛亜鉛研究会

図2-1 鉛価格と鉛在庫量の推移

2. 需給(2005年1~3月)

鉛生産は、前年同期比4.2%増。地金生産も同9.3%の増加。地金生産は、中国、英国、ドイツの伸びが大きい。消費は中国で伸びたが韓国で減少し、前年とほぼ同じ。

2005年1~3月の世界の需給バランスは、4.5千tの供給不足で、ほぼ需給バランスが取れている状況となった。

LME在庫量は5月末には29.7千tまで減少し、8か月連続の減少となった。

2005年1~3月の世界の鉛生産は747千tであり、前年同期比4.2%増となった。2位豪州、4位ペルー、5位メキシコで増産となった。最大生産国の中国では1.0%減、3位米国で4.7%減となった。

2005年1~3月の世界の鉛地金生産は1,792千tであり、前年同期比9.3%増となった。最大生産国の中国で18.2%増と顕著な伸び。4位英国も21.5%増となった。2位豪州は2.6%増、3位ドイツが8.7%増。日本は5位で3.6%減となった。

2005年1~3月の鉛消費量は、前年同期とほぼ同じく1,816千tとなった。世界第2位の中国

で8.0%増となり、1位の米国に肉薄している。3位ドイツは4.2%増であったが、4位韓国は9.6%減となった。

2005年1~3月の世界の鉛需給バランスは、米国備蓄放出分も考慮すると4.5千tの供給不足で、前年同期の153千tの供給不足と比べて不足量はかなり減少し、ほぼ需給バランスが取れている状況となっている。

LME鉛在庫量は、2005年5月末で29.7千tとなり、前月比3千t減少した。LME鉛在庫量は、2004年10月以降、8か月連続して減少している(表2-1)(表2-2)。

表2-1 鉛の需給状況

単位:千t

鉛	2004年													2005年				前年 同月比 (%)
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年計	1月	2月	3月	1~3月計	
鉱山生産量	233	238	246	265	268.5	260.7	268.6	255.8	253.1	276.6	258.4	248.3	3,072	246.2	240.9	260.0	747.1	5.8
地金生産量	545	524	571	580	592.8	569.0	542.9	531.1	574.3	605.2	598.3	587.4	6,821	594.8	583.6	614.1	1,792.5	7.5
米国備蓄放出	1.8	5.3	7.8	4.5	6.9	2.4	5.7	3.0	7.3	4.1	4.3	3.1	56.2	2.5	2.6	14.4	19.5	-
消費量	607	585	616	579	602.7	580.2	577.3	555.4	573.7	602.4	605.1	597.2	7,081	611.1	596.7	608.7	1,816.5	-1.2
需給バランス	-60	-56	-37	6	-3.0	-8.8	-28.7	-21.3	7.9	6.9	-2.5	-6.7	-204	-13.8	-10.5	19.8		-

出典：国際鉛亜鉛研究会

表2-2 LME 国別鉛在庫量の推移

単位:千t

国名	2004年									2005年				
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
米国	42.9	31.1	23.4	16.8	13.7	12.3	8.3	7.1	4.9	4.0	2.5	1.2	1.1	
イタリア	10.3	10.3	9.5	9.8	9.8	9.8	9.8	9.5	9.5	10.7	10.7	8.9	7.7	
オランダ	0.3	0.3	0.2	4.3	4.3	2.7	1.8	1.6	0.9	0.8	0.7	0.7	0.7	
シンガポール	5.2	3.1	4.0	4.3	25.0	24.1	23.0	22.3	19.9	18.1	19.4	21.9	20.2	
その他	0.4	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
合計	59.1	45.1	37.5	35.6	53.1	49.2	42.9	40.5	35.2	33.6	33.3	32.7	29.7	

出典：国際鉛亜鉛研究会

< 今後の需給見通し >

国際鉛亜鉛研究会は、今年5月の発表で、世界全体の鉛生産は、2005年に10.8%増と顕著な伸びを示し、3,372千tになると予測。これは主に豪州と中国の増産によるもので、豪州はMount Isa鉱山のBlack Star鉱床の開発と西豪州のMagellan鉱山の開発が増産に寄与し、

23%増の予測。中国では、主に内モンゴルのBairendaba鉱山の開発があり、中小鉱山でも最近の鉛価格上昇を背景に増産が予測され、12%増の予測。欧州でもアイルランド、スウェーデンが引き続き増産し、ギリシャでもKassandra鉱山が再開される見通しであり、欧州全体で11.5%増の予測。

鉛地金生産は、世界全体で2005年に3.7%増の7,085千tになると予測。これは主に欧州と中国の増産による。欧州では4年連続減少していたが、ベルギー、ブルガリア、イタリア、英国の増産により欧州全体で8.8%増の予測。中国でも雲南省のQujingで100千tの生産能力の新製錬所が生産を開始し、2.6%増の予測。

国際鉛亜鉛研究会は、世界全体の鉛地金消費が2005年に2.5%上昇し、7,250千tに達するも

のと予測。主要因は中国で8.1%上昇することによる。日本では、2004年に急激に減少した後、回復の予測。インド、マレーシア、台湾、タイ、トルコでも上昇を予測。米国鉛備蓄放出量は、2004年と同レベルの55千tとなる見通し。

上記のデータから、2005年の需給バランスは、西側世界で105千tの供給不足、世界全体では110千tの供給不足となる見込み。

3. 亜鉛の国際市況と需給動向(2005年5月)

金属資源開発調査企画グループ

1. 亜鉛の国際価格は、3月16日にはt当り1,430ドルまで上昇したが、その後ドル高を背景として投機ファンド資金の一部流出があり、4月14日以降1,200ドル台で推移した。
2. 2005年1～3月の鉱石生産は前年同期比1.0%増と伸び悩んだ。地金生産は同5.1%増で鉱石不足が顕著となった。消費は同3.5%増。
3. 世界の需給バランスは、3か月連続して供給不足となり、LME在庫量は8か月連続の減少となった。

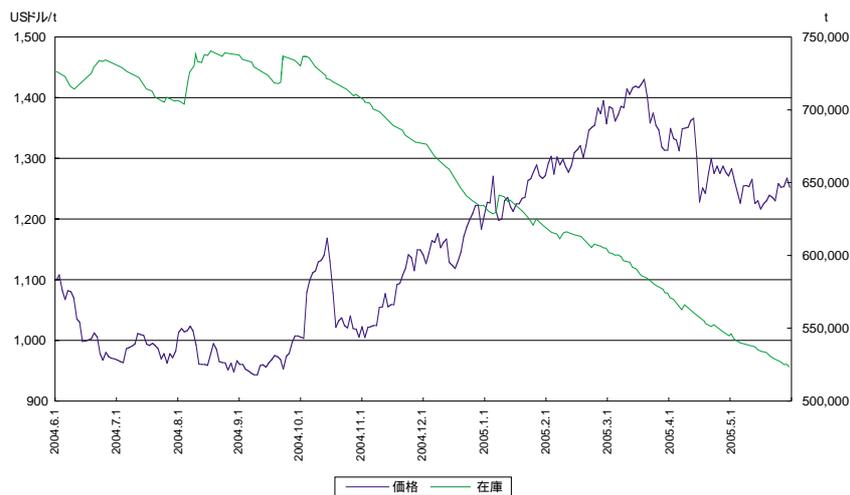
1. 国際価格

亜鉛の国際価格は、3月16日にはt当り1,430ドルまで上昇した後、ドル高を背景として投機ファンド資金の一部流出があり、4月14日以降1,200ドル台で推移した。5月16日には1,216ドルまで低下した。

亜鉛の国際価格は、2004年11月以降、ドル安の進行に加え、LME在庫が減少していること等を材料に亜鉛価格は上昇を続け、年末には2004年最高値となる1,270ドル/tを付けた。

2005年に入り、1月に中国で電力不足による亜鉛製錬所減産、2月10日には2006年3月で豊羽鉱山操業休止が伝えられたこともあり、LME価格の上昇が続いた。3月には、亜鉛生産量で世界第2位である豪州のCentury鉱山が、SAG

(半自生粉碎)ミルの電気系統の障害により11.5日間操業を中断した影響もあり、3月16日にはLME価格はt当り1,430ドルまで上昇し、1997年9月以来7年ぶりの高値を更新した。その後ドル高を背景として投機ファンド資金の一部流出があり、4月14日以降1,200ドル台で推移した。5月16日には1,216ドルまで価格が低下した。5月末価格は、1,252ドルとなった(図3-1)。



単位：千t

亜鉛	2004年							2005年				
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
LME在庫(t)	730,125	705,225	734,175	736,450	705,150	669,825	628,625	615,925	601,600	570,600	546,375	522,925
平均価格(US\$/t)	1,021	988	976	975	1,065	1,096	1,180	1,246	1,326	1,378	1,300	1,244

図3-1 亜鉛価格と亜鉛在庫量の推移

出典：国際鉛亜鉛研究会

2. 需給 (2005年1～3月)

鉛生産は前年同期比1.0%増と伸び悩んだ。地金生産は同5.1%増で鉛不足が顕著となった。消費は同3.5%増で中国、ドイツ、韓国で消費が伸びている。2005年1～3月の世界の需給バランスは41.4千tの供給不足で、3か月連続の供給不足となった。LME在庫量は、5月末に523千tまで減少し、8か月連続の減少となった。

2005年1～3月の世界の亜鉛生産は2,351千tであり、対前年同期比1.0%増となった。ペルーで2.1%の伸びとなったが、カナダでBell Allard 鉛山が2004年12月に閉山、Bouchard-Hebert 鉛山が2005年2月に閉山したことにより15.3%の大幅な減産となり、米国に抜かれ第5位に転落した。最大生産国の中国で0.5%増、豪州もCentury 鉛山の11.5日間の操業中断の影響で0.9%増と伸び悩んだ。

2005年1～3月の世界の亜鉛地金生産は、2,579千tで、対前年同期比5.1%増となった。最大生産国の中国は、1月に電力不足のため株洲製錬所で減産があったが、その後生産が回復し第1四半期の地金生産は対前年同期比5.6%増となった。第2位のカナダ、第3位の韓国、第4位の日本も、需要増加、地金価格上昇により5～6%台の増産となった。

2005年1～3月の亜鉛消費量は、2,623千tで前年同期比3.5%の増加となった。最大消費量の中国で8.6%の大幅増となった。第2位の米国では12.2%減、第3位の日本でも3.0%消費量が減少となった。韓国では、自動車向け亜鉛めっき鋼板の生産が好調で、亜鉛消費量が22.9%増となった。

2005年第1四半期の世界の亜鉛需給バランスは、1月から3月までいずれも供給不足となった。3か月の供給不足量の合計は41.4千tとなった。対前年同期比では、供給不足量は45%減少した。

亜鉛のLME在庫量は、2005年5月末で522.9千tとなり、前月末と比べて23千t減少した。LME亜鉛月末在庫量は、2004年10月以降、8か月連続して減少している(表3-1)(表3-2)。

表3-1 亜鉛の需給状況

単位:千t

亜鉛	2004年												2005年				前年同期比 (%)	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年計	1月	2月	3月		1-3月計
鉛山生産量	764.0	756.0	807.0	802.0	791.5	796.9	830.9	814.0	817.5	830.0	837.5	789.0	9,636	782.1	762.3	806.4	2,350.8	1.0
地金生産量	807.9	802.1	843.0	822.0	861.6	874.4	838.0	857.5	858.3	875.6	839.9	886.5	10,167	837.6	839.0	902.4	2,579.0	5.1
米国備蓄放出	1.3	1.2	4.2	4.2	3.8	2.2	1.8	5.1	2.2	2.4	2.4	1.6	32.4	0.9	0.2	1.7	2.8	-
消費量	851.0	804.0	880.0	900.0	935.8	866.4	866.7	877.0	872.2	882.1	878.8	850.8	10,465	868.8	845.0	909.4	2,623.2	3.5
需給バランス	-41.8	-0.7	-32.8	-73.8	-70.4	10.2	-26.9	-14.4	-11.7	-4.1	-36.5	37.3	-265.6	-30.3	-5.8	-5.3	-41.4	-

出典：国際鉛亜鉛研究会

表3-2 LME 国別亜鉛在庫量の推移

単位:千t

国名	2004年								2005年				
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
米国	336.5	327.4	317.6	329.9	324.6	318.5	309.7	293.0	306.7	305.6	304.1	299.8	296.1
イタリア	76.3	102.6	102.1	124.1	123.0	121.8	118.2	112.1	106.5	105.2	104.1	102.3	100.3
UAE	153.8	148.2	140.1	132.3	124.0	113.1	102.1	92.9	86.7	77.0	64.6	59.4	48.3
シンガポール	99.8	98.6	97.3	101.4	114.8	101.7	92.4	84.9	76.5	66.7	53.6	47.1	43.1
オランダ	38.3	36.0	33.0	32.2	36.3	34.6	32.9	31.0	25.7	28.5	25.8	19.6	17.2
英国	12.8	12.2	11.8	11.4	10.9	10.5	10.3	9.8	9.6	14.3	14.1	13.8	13.5
その他	9.9	5.1	3.3	2.9	2.9	5.0	4.2	4.9	4.2	4.3	4.3	4.4	4.4
合計	727.4	730.1	705.2	734.2	736.5	705.2	669.8	628.6	615.9	601.6	570.6	546.4	522.9

出典：国際鉛亜鉛研究会

<今後の需給見通し>

国際鉛亜鉛研究会は、2005年5月の発表で、世界全体の鉱石生産は、2005年に5.3%増の10,147千tと予測。新規プロジェクトが数件生産開始となる予定。中国では雲南省の蘭坪鉱山が生産開始となり、インドではRajasthanのRampura Agucha鉱山が拡張となる。米国ではBalmat鉱山が再開される見込み。欧州では、アイルランド、ギリシャ、ロシア、スウェーデンで増産となり、欧州全体で8.2%増の見込み。豪州、メキシコ、モロッコ、ペルーでも増産が予定されている。カナダはBell Allardが2004年12月に閉山、Bouchard-Hebertが今年2月に閉山したことにより2005年は14%減の予測。

欧州の亜鉛地金生産は、主として最近Umicore社がフランスでの減産を発表したことから減産が予想されているが、世界全体の亜鉛地金生産は3.1%増の10,486千tと予測。インドでは、Hindustan Zinc製錬所の増産により28%増と顕著な伸び。中国、日本、カザフスタン、韓国でも増産の見通し。南米では、ペルーのLa Oroya製錬所が環境問題で減産。ブラジル、メキシコでは増産の見通し。

他の金属や原料と同様に、2005年の亜鉛市場

に最も影響を与えるのは、中国の消費の更なる拡大である。亜鉛の場合、2005年の中国の消費の伸びは8.7%と予測され、住宅、自動車、家電部門での亜鉛めっき鋼消費の急速な拡大が続くことによる。また、道路、鉄道、発電所、送電施設建設等のインフラ部門での消費も拡大している。2005年の世界全体の亜鉛地金消費は2.1%増の10,692千tと予測され、2004年と比較して伸び率は縮小する見込み。

2005年の西側世界の亜鉛需給バランスは、200千tを若干下回る程度の供給不足となる見込み。米国備蓄物資放出を考慮すると、世界全体の供給不足量は176千tと予想される。

世界的な調査機関であるCRUやBrook Huntでは、2005年の亜鉛地金の供給不足をそれぞれ、390千t、495千tと昨年よりも拡大すると見ており、供給不足は2006年まで続くと予測している。また、亜鉛生産大手ノランダ社は鉱石の供給不足が2007年まで持続するとの見方を示しており、研究会の予想に懐疑的な見方もある。日本の亜鉛生産者も現状では鉱石不足が深刻化しており、供給不足の解消に目途がたっていないとの懸念がある。

4. ニッケルの国際市況と需給動向(2005年5月)

希少金属備蓄グループ

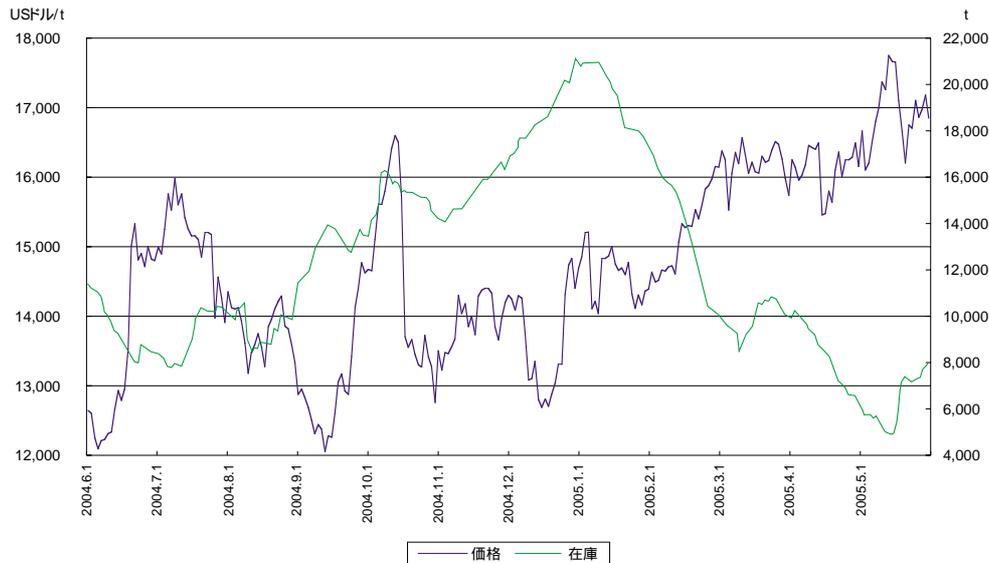
1. ニッケルの国際価格は1月初め14,105ドルへと急落で始まったが、2月より上昇傾向に転じ、4月上旬まで16,000ドル台を堅調推移。4月中旬15,455ドルへと急落したが、その後回復し、5月上旬には在庫減少などから17,370ドルへと高騰。5月末時点で16,850ドルと依然として高値。
2. 2005年1～3月の需給バランスは、微量(300t)の供給過剰。LME在庫量は、2005年に入り大幅に減少し、5月末時点で8,064tと低水準。
3. 今後、ニッケル供給はメンテナンス等の影響で減産が予想され、ステンレス需要は好調、航空機向け需要は急速に回復しており、需給は引続きタイトとの見方が強い。一方、国際ニッケル研究会は、2005年ニッケル需給はほぼバランスすると予測している。

1. 国際価格

ニッケルの国際価格は1月初めに14,105ドルへと急落したが、2月中旬からは在庫減少を背景に上昇傾向に転じ、2月後半には16,000ドル台を付け、4月上旬まで16,000ドル台を堅調推移。4月中旬投機筋の利食い売りにより15,455ドルへと急落したが、その後16,000ドル台へと回復。在庫減少などから5月10日には17,370ドルへと高騰。5月末時点で16,850ドルと高値を付けている。

ニッケル国際価格は、1月4日に14,105ドルへと急落。しかし、その後はLME在庫減少などからの需給タイト感を材料に反転し、14,000ドル台半ばで推移し、2月中旬からは他の非鉄金属同様、堅調な需給に下支えされ15,000ドル台を維持。その後上昇傾向が続き、2月24日には16,150ドルを付け、2004年10月以来の16,000ドル台となった。3月に入っても16,000ドル台で堅調推移し、一時、ドル高に伴い16,000ドルを割り込んだものの、月末には16,000ドル台に回復。4月上旬も16,000ドルから16,500ドルの高

値で推移したが、他の非鉄金属同様、ドル高を背景とした投機筋の利食い売りにより、4月13日に15,455ドルへと急落。しかし、その後はドルの反落に伴い16,000ドル台へと回復し、月末には16,660ドルへと上昇。5月に入り、在庫減少などからさらに高騰し、5月10日には17,370ドルとなり、2004年1月以来の17,000ドル台となった。その後、5月18日には16,650ドルへと反落したものの、5月下旬には再び17,000ドル台となり、5月末時点で16,850ドルと依然として高値を付けている(図4-1)。



ニッケル	2004年							2005年				
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
LME在庫(t)	8,394	9,978	11,592	14,322	14,094	17,358	20,898	16,644	9,924	9,936	6,240	8,064
平均価格(USD/t)	13,540	15,032	13,686	13,277	14,411	14,053	13,776	14,505	15,350	16,190	16,142	16,932

出典：国際ニッケル研究会

図4-1 ニッケルの価格と在庫量の推移

2. 需給(2005年1～3月)

2005年1～3月の鉱石生産は1.3%(4.2千t)の増。地金生産は1.4%(4.4千t)の増。消費は3.2%(9.9千t)の増。

2005年1～3月の需給バランスは、微量(300t)の供給過剰。

LME在庫量は2005年に入り大幅に減少。5月末時点で8,064tと低水準。

2005年1～3月のニッケル鉱石生産は321.8千tで、対前年比1.3%(4.2千t)の増となった。最大生産国のロシア、第2位のカナダはほぼ変わらず、第3位の豪州は4.5%(1.9千t)の増、第4位のインドネシアは9.2%(3.3千t)の増となり、第5位ニューカレドニアの14.7%(3.9千t)の減を補った。2005年1～3月のニッケル地金生産は319.0千tで、対前年比1.4%(4.4千t)の増となった。最大生産国ロシアはほぼ変わらず、第2位の日本は6.7%(2.9千t)の減、第3位のカナダは4.3%(1.6千t)の減となり、第4位の豪州20.1%(5.5千t)増がこれを補った。2005年1～3月のニッケル地金消費は318.7千tで、前年比3.2%(9.9千t)の増となった。消

費量第1位の日本、第3位の米国はほぼ変わらず、第2位中国が25.4%(8.6千t)の増、第4位の韓国が4.7%(1.2千t)の増であった。

2005年1月～3月の需給バランスは、微量(300t)の供給過剰となっている。

ニッケルの金属取引所在庫量は、2005年に入り減少傾向に転じ、2005年年初には20,000t程度だったが、2月末時点で9,924tと大幅に減少した。3月に入り多少の回復はしたものの、4月にはさらに減少し、5月中旬には5,000tを割り込み1991年以来の低水準となった。その後やや回復し、5月末時点で8,064tとなっている(表4-1)(表4-2)。

表4-1 ニッケルの需給状況

単位：千t (Ni純分)

ニッケル	2004年													2005年				前年 同期比 (%)
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年計	1月	2月	3月	1-3月計	
鉱山生産量	107.6	103.0	107.0	109.4	106.2	105.2	104.0	106.6	111.5	111.8	105.0	106.7	1,284	102.8	106.6	112.4	321.8	1.3
一次地金生産量	108.7	103.2	102.7	105.7	103.7	100.5	97.2	104.5	101.4	105.6	106.1	110.4	1,250	108.4	103.0	107.6	319.0	1.4
消費量	102.0	101.3	105.5	105.6	101.4	107.1	103.8	96.6	102.0	105.8	105.7	105.5	1,242	108.6	102.1	108.0	318.7	3.2
需給バランス	6.7	1.9	-2.8	0.1	2.3	-6.6	-7	7.9	-0.6	-0.2	0.4	4.9	8	-0.2	0.9	-0.4	-	-

出典：国際ニッケル研究会

表4-2 在庫量変遷 (2004年5月～2005年4月)

単位：t

国名	2004年									2005年				
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
ベルギー	1,248	900	900	84	66	6	-	-	-	-	-	-	-	
ドイツ	630	630	564	522	420	396	366	216	126	42	6	-	-	
イタリア	84	156	192	192	144	138	78	90	60	42	42	42	348	
オランダ	7,776	4,770	3,444	4,224	3,582	2,460	858	3,024	1,758	1,050	3,780	1,518	5,196	
シンガポール	594	1,362	1,950	2,604	1,308	138	30	30	24	6	804	336	6	
スウェーデン	-	-	-	-	1,230	2,706	2,682	2,475	2,478	2,226	1,434	1,188	984	
英国	1,110	576	2,928	3,966	7,572	8,250	13,344	14,940	12,198	6,558	3,870	2,940	1,410	
合計	11,442	8,394	9,978	11,592	14,322	14,094	17,358	20,898	16,644	9,924	9,936	6,024	8,064	

出典：国際ニッケル研究会

< 今後の見通し >

2005年の今後のニッケル供給については、主要な生産者のメンテナンスによる減産や労使交渉による影響の見通しもあることから、タイトと予測される。また、需要については、中国を中心とする世界的なステンレス鋼向けニッケル需要は好調であり、航空機向け特殊鋼の需要も急速に回復していることから、業界紙、メディア等によると、2005年のニッケル需給は今後も

タイトとの見方が強い。

一方、国際ニッケル研究会によると、2005年の一次ニッケルについては、生産、消費ともに1.3百万t程度の増加を見込んでおり、ニッケル需給はほぼバランスすると予測している。

ニッケル価格については、引続き需給はタイトであり、在庫は極度の低水準であることなどから、今後さらに価格が上昇する可能性もある。